

向学館通信

2009・4・24

中学生の英語学習はパソコンで

アロックワークという英語学習ソフトを常備しています。単語や構文を覚えるのに最適のシステムです。しかし、授業時間にこれを使うより、自習に来て使った方が得です。もっと自習に来て、活用して下さい。

考える力を伸ばすには、詰め込みはよくない

自分の頭を使って、考えるのか、考えないで暗記しようとするのかの違いは、小学校5年生ぐらいになると、はっきり分かれているように思われます。暗記タイプの子は、算数の文章題を考えさせようとしても、自分の頭のなかの記憶箱をさがして、その箱になければ「わからないで当たり前」として済ませようとしています。

他方、考える子は、問題を解く糸口はないか、すでに知っている知識を組み合わせる解く方法がないか、見方を変えてみるとどうなるか、など、自分の頭を使うことで答えを得ようと努力します。つまり、頭をどんどん使うからますます伸びることになります。暗記タイプでは、頭を使うことがきわめて少ないので、中学生以降になると大きな差がついてしまいます。

以上のことは、塾や学校の先生なら、みんな経験で知っていることです。

暗記タイプの子をそのままにしておくと、学年が上がるごとに成績が低下していきます。なぜなら、上級になればなるほど暗記する量が多くなりすぎて、理解なしには頭に定着しないからです。しかし、小学生の間は、暗記する量も少ないし、暗記が得意な時期でもあるので、暗記タイプはけっこういい成績をとります。しかし、このタイプの多くは、中2ぐらいから成績が落ちはじめます。こうしたことも、どの塾の先生方もご存じです。ところが、その対策となると、ほとんどのところでは手が打たれていないようです。それどころか、逆に中学受験などの実績を上げようとするあまりの「つめこみ」教育になって、考える力を奪っているような傾向さえ見られます。

子どもは、小学校での成績より、中学・高校とすすむに従って成績が向上していくような基礎力を小学校の間につけたい、と考えています。

このための方法として、小学生の間に、国語の理解力・論理的な思考力をつけたいと考えています。中学生、高校生に対しても、基本的な対策は同じになります。

とはいえ、考えることを嫌うまでになってしまった生徒は、考えるタイプに引き戻すのはきわめて困難だということも、事実です。だからこそ、早めの対策が必要です。

高校生で成績が伸びない人は、ほとんど国語が弱い

国語力は、学校での勉強だけで伸びるのではないようです。家での日常会話や話題の質などによっても、子どもの関心事に大きな差が生じます。「何でも知りたがる子」と「何にも無関心な子」のような両極があり、「知りたがる子」は、言葉をどんどん覚えて知識を増やしていくことを楽しんでやります。

知識を得るための手段は、言葉です。考える方法も、言葉の操作です。言葉が豊富でなければ新しい知識も増やすことができないし、自分で考えをまとめることも十分にできなくなります。高校生になると、国語をはじめとして、社会や理科の教科書の内容は、高度で難しくなります。ところが、高2、高3になって中1、中2程度の国語力の人もあります。こうなると、学校の授業がほとんどわからない、先生の言うことが頭に入らないということになります。

こうしたケースでは、学年とは無関係に、国語の基礎をやり直すことを始めるのが、その子の将来にとっても最善のことだと思います。しかし、生徒は、目先のテストなどに振り回されて、国語の勉強に手が回らないという状態が続きます。このため、結果として何も身につかないまま、苦しい高校生活を送ることになってしまいます。このような国語力の低さによる学力低下を防ぐこと、そして、高いレベルの理解力を獲得させることが私たちの任務だと思います。